

匠たちの名旅館

稲葉なおと・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み



平田雅哉の宿

一 大棟梁の面影

——南紀白浜・万亭

映画のモデルになったひと

その日は、大正時代の別荘を移築した宿、万亭まんていを訪れていた。

京都に建てられた一力茶屋いちりきぢやの別荘を譲り受け、南紀白浜に移築し改装した旅館があると聞いて、大正時代の別荘とはどのような建物なのか、泊まりながら見学し、撮り残したいと思ったのだ。

早めに宿に着いた私は、他の宿泊客が到着してしまう前にと、別荘時代の洋館風の意匠を残す本館一階の玉突き室やロビーと合わせて、客室へと改装されたかつての寝室をひとつずつ見学させてもらった。二階に並ぶ部屋は一階とは打って変わってどれも民芸調しんげんの設えで、和洋折衷の建物は、洋の部分にも、和の部分にも、大正の雰囲気がよく残っていた。

二階の廊下伝いにつながる別館にも部屋がいくつああったが、トイレは昔ながらの和便器だ。風呂場も、壁に貼られたモザイクタイルは眼を引くものの、サイズは建った年代を感じずにはいられない狭さだった。本館の客室とは意匠が異なるので、おそらく別荘とは

別に新たに増築された建物なのだろうと思いつつ、一階に戻り、受付で確認すると、宿泊のための客室ではなく、食事や宴会用に使われているという。

庭に出てみる。歩いていくと、本館や別館からは独立した離れ座敷まである。想像していたよりもずっと大きな規模の旅館だった。一巡するだけで、かなりの時間を要したが、見学して撮影のポイントを絞ったお陰で、日が暮れ切るまでに、大正の元別荘の意匠を効率よく撮ることができた。

撮影が一段落したところで、宿の主人に誘われ、広間で宿自慢の夕食を共にすることにした。

料理は、宿の内装と同様に和洋折衷だった。前菜はカンパチのカルパッチョ。桃色の切身が白い皿の中央に盛られている。バルサミコとオリーブオイルのソースが素材に彩りを添え、食欲をそそられる。ひと切れ口にすると、脂の乗ったカンパチが上質なバルサミコの柔らかな酸味と一緒に舌の上でとろけた。箸で最後につまんだ身で、皿のソースを残らず拭き取るようにして平らげた。

目移りするほど数あるワイン・リストの中から、主人の勧めで、ロワール地方プイイ・フュメ地区の白を呑んでいた。主人はアメリカのオハイオ大学を卒業し、大手食品会社にかつては勤務。アメリカ、オーストラリア、そしてドイツのデュッセルドルフに長年暮らしたこともあるというような話を聞きながら、気がつくとき空になったグラスには、まるでその様子を天井裏から監視していたのではと思うようなタイミングで、着物姿の女性マネージャーが注ぎに来てくれる。

前菜の次に届いたのは、フォアグラと茄子の旨味を存分に活かした清汁仕立てにキャビ

アを添えた煮物。

「冷たい料理で少し冷えた口に、今度は温かな料理を届けるんですよ」

主人が、フォアグラの味を確認してからいった。

「そのあとはまた、冷たい料理。これが料理の美味さをさらに引き出す、ひとつのコツです」

明快な解説に、黙ってうなずきつつ箸を進める。

サウナで火照った素っ裸のまま、水風呂に飛び込むようなものです。そんな台詞が私の頭には浮かんでいたが、食にこだわりを持つ相手には相応しくない喩えだと思い、口には出さなかった。

フォアグラの次に届いたのは、鮪と平目、雲丹の造り。そして、銀鱈の西京焼きに、生春巻きの吸い物。やがて、牛ロースの陶板焼きと鰯のツミレ鍋へと続く。冷、温、冷、温という献立の組み合わせは、たしかに、料理それぞれの冷たさと温かさがより引き立てられ、旨味が強調されるようだ。

満足の笑みを何度も浮かべながら、昼間見学した建物の感想を主人に語るうちに、庭の先にある離れ座敷「浜木綿」の話題になった。入り口の建具にしても玄関回りの雰囲気にしても、襖や床の間のデザインにしても、繊細で上品な作りで、和洋を折衷させた京都の別荘とは明らかに異なっていた。

「離れももしかしたら、京都とはまた別の別荘を移築されたんですか？」

私が訊ねると、あの離れは昭和三十一年（一九五六）に新しく増築したものです、と主人は教えてくれた。

「平田棟梁の手によるものですから」

「平田棟梁……？」

「棟梁の平田雅哉ですよ」

「……………」

「ご存知ないですか？」

頭を微かに捻る私に対して、主人は顔に一瞬、落胆のいろを浮かべたが、すぐに笑顔を
つくって、映画のモデルにもなったんですよ、と付け加えた。

平田——。棟梁——。映画——。モデル——。

与えられたヒントをもとに、私は記憶の奥深くまで探ってみる。だが、結局何も見つけ
られず、仕方なく正直に訊ねた。

「映画のモデルにもなった棟梁が、居たんですか？」

「やっぱり今のひとには、棟梁はとうに忘れられた存在なんでしょうね」

私は自分が「今のひと」の代表になったような気がして、その責任の重大さに、すみま
せん、と頭を下げた。

主人によると、棟梁は生前、半生記を書き残しており、映画はその内容を原作に制作さ
れたものだという。大工の半生を映像にしたのなら、テレビでいえばNHKスペシャルの
ような、仕事の現場をつぶさにカメラが追うドキュメンタリー・タッチの硬い映画を想像
したのだが、そうではなかった。監督は、「雪国」や「暗夜行路」「恍惚の人」など、文芸
作品の映画化では定評のある豊田四郎。主演の棟梁の役は森繁久彌が演じたというから、
かなり力の入った娯楽映画だったようだ。

「森繁自身が忘れられないと語っていた、有名な台詞がありましたね、棟梁が弟子を叱る際の台詞なんです、その本のカバーにも印刷されていて、たしか……」

それは、こんな台詞だった。

へええか、ようききや、お前の傷は嘗めりやなおるが、この柱の瑕は、永遠になおらんもんじゃない、分かったかー」

不勉強な私は主人の説明を聞いて初めて、棟梁が、吉兆や、なだ万といった名だたる料亭の設計と施工も手がけた、大工としてだけでなく、茶室風の様式を取り入れた、数寄屋建築においては建築家としても第一人者であることを知った。その棟梁が、万亭において、別館を建てたばかりでなく、本館にもかなりの手を入れていたのだ。

各部屋に残る匠の技

翌日、主人の案内で、私は今一度宿の中を見学させてもらった。

門。玄関口。別館の部屋部屋。そして離れ座敷。

まずあらためてじっくりと見直したのは、玄関だった。訪れた客が、宿の建築と最初に出会う場であり、宿泊を楽しみに訪れた客のところに、最初に印象づけられる場所である。

敷地に大きな高低差があり、高台に建つこの宿では、表の通りからは建物の外観も玄関も見えない。棟梁は階段を途中で九十度折り曲げることで、客が上り始めてもすぐには、玄関さえ眼に入らないように工夫していた。階段を上っていくうちに、訪れたひとの胸には、どんな建物が待ち構えているのだろうという期待がふくらむのだ。やがて、徐々に姿

を現わす玄関口には、南紀白浜を代表する宿としての風格がかたちづくられている。

間口を広く、大きく、ゆったりと開け放された先に見えるのは、フロント・カウンターと格子壁^{こうしかべ}。客の意表を衝くような、和洋折衷の設えだ。天井は杉の柾目板^{まさめいた}。板の目が、客の視線を入り口から玄関奥へと一気に誘いこむ。壁と、カウンターの腰板^{こしいた}は、天井とは対照的な松の板目。松材独特の、大振りで複雑な目が、一定の間隔で何度も繰り返される様子は、まるで上質な石灰岩を張ったような重厚さを醸^{かも}し出している。玄関に入ってすぐの土間部分の床は、白い小石がいくつも浮き出た小砂利洗い出し。高級な料亭のカウンターを思わせるような、奥行き半間（約九十センチ）はあろうかという見事な一枚板の上がり框^{がまち}。その向こうのフロントの床は絨毯敷だ。日本旅館風の従来の設えに、ところどころ、ホテル的な洋の要素を付加した意匠だった。

ここでさらに注目すべきは、照明だろう。客が靴を脱ぐ上がり框の真上の天井が、同じ幅、同じ奥行き^の光天井になっている。まるで、天井から放たれた光が、そのまま床に、一枚板となって映し出されたようだ。天井の面から出っ張ることなく、平坦に納まった美しい仕上りの天井照明は、杉の柾目にも溶け込んでいた。

客室も、棟梁の作とわかった上で見直すと、前日見学したものとは、まったく別の部屋に見えてくる。一階の「栗の間」、二階の「松の間」、三階の「竹の間」の三室、そして二階の「桜の間」、一階の「梅の間」、一階の「檜の間」の三室は、広さは八畳もしくは十畳と共通しているのに、使用する木材はもちろん、その仕上げ方から使用方法、そして醸し出される雰囲気まですべて異なっていた。

「梅の間」では、皮を残した丸太を背骨のように使った、船の底を中側から見上げたよう

な形の、舟底天井が印象深い。床柱は、複雑な凹凸が照明を反射する古材。洋風が印象づけられる玄関とは対照的に、古材を使用した古めかしい意匠は、移築された京都の茶屋建築とのバランスを意識したのかもしれない。「檜の間」の天井が、板の目が白っ茶けて浮き出るような、砂ずり仕上げなのも、同様に、歴史ある建物へ増築するのに、あえて古さを演出したのだろう。

古めかしさを感じさせる一方で、独自の新しさの演出も棟梁は試している。「檜の間」の天井の勾配が、畳敷きの間にとまらず、板敷きの広縁の先にまで流れていく様子や、「竹の間」のお盆を思わせる丸い照明器具が、床の間に向かっていくつも連なる様子は、水平への流れを強く意識する、近代洋建築の意匠に似たイメージだ。

案内され、部屋の中に足を踏み入れ、見上げ、眼をこらす。障子の棧の繊細なつくりや、床の間の造形美を目の当たりにするたびに、私はつい苦笑してしまった。前日、私が着目した建物とはまったく別のところにもまた、じっくりと見つめるべき技が潜んでいたのだ。いや、潜んでなどいない。門にしろ、玄関にしろ、そして各部屋の見どころにしろ、それらは別段隠されることなく、日々訪れる客の眼にふれているものだった。私自身も、昨日一度、向き合っていたはずの意匠ばかりだった。それなのに、「撮るべきは大正時代の元別荘」という先入観から、棟梁の技が冴えわたる部屋の存在にも、各部屋で今も光る見どころにも、私は気づきもせず、素通りしていたのだ。主人に教わらなければ、名匠の遺構をすべて撮り残したまま、宿を後にするところだった。

昨日、「栗の間」や「松の間」を見た私は、なんだいままだに和便器か……、と思い、「梅の間」の奥を覗いて、この風呂場は信じられないほど狭いな……、と感じていた。どの部

屋に対しても、こころにわき起こったのは、今の客に対応できるように少しは改装すればいいのに……、というような後ろ向きの感想ばかりだった。

だが、後ろ向きの感想を抱いた部分こそが、改装の手を入れていなかったお陰で今も残る、棟梁の作品の一部だったのだ。

「棟梁の貴重な意匠を壊してしまうのには躊躇ためらいを感じてしまって、いまだに改装もしないでそのまま残しています」

主人の言葉に私は何度も、

「よくぞ残してくださいましたねえ」と繰り返した。

村野藤吾が、負けた

平田棟梁はすでに亡くなっていたが、棟梁が大阪・日本橋に興した建築会社・平田建設とは今でも付き合いがあるというので、私は主人に頼んで、その会社に電話を入れ、棟梁が手がけた建築工事の施工履歴をファックスで送ってもらった。履歴の中にまた別の旅館の名が残されていれば、ぜひとも泊まりながら見学してみたいと思ったからだ。

すぐさま送られてきた資料に眼を通しながら、私はあらためて自分の無知を思い知らされた。皇族の茶室や個人の邸宅に混ざって、有名な旅館や料亭の名がいくつも記されていたからだ。宿泊ができそうな建築工事の名称を、まずは書き出してみる。

名称	竣工年
中山悦治別邸 <small>（後の大観荘本館）</small> <small>なかやまえつじ</small> <small>たいかんそう</small>	昭和十六年（一九四一）
大観荘本館（別邸改装）	昭和二十四年（一九四九）
大観荘中広間増築	昭和二十九年（一九五四）
つるや改造	同年
万亭旅館離れ座敷新築	昭和三十一年（一九五六）
つるや新築	昭和三十二年（一九五七）
つるや第二期	同年
大観荘大広間新築	昭和三十三年（一九五八）
かめや旅館増築	昭和三十四年（一九五九）
西村屋別館新築 <small>にしむらや</small>	昭和三十五年（一九六〇）
大観荘増築	昭和三十六年（一九六一）
友来旅館改装	昭和三十八年（一九六三）
大観荘増築	昭和三十九年（一九六四）
大観荘大広間増築	昭和四十一年（一九六六）
西村屋改造	同年
福田旅館新築	昭和四十二年（一九六七）
大観荘会議室・客室増築	昭和四十三年（一九六八）
万亭客室改造	同年

大觀莊客室増築

昭和四十六年（一九七二）

大觀莊中広間・会議室増築

昭和五十年（一九七五）

東南院宿坊新築

同年

大觀莊第二本館新築

昭和五十八年（一九八三）

つるや改造

昭和六十一年（一九八六）

大觀莊増築

平成二年（一九九〇）

大觀莊大浴場等増築

同年

万亭大浴場改造

同年

建物名称の脇に添えられた依頼主のリストには、著名な茶人や実業家の名が並ぶ。その中の、「村野藤吾」という名前が眼に留まった。

村野邸離れ増築工事

昭和十八年（一九四三）

文化勲章、日本芸術院賞をはじめ華々しい受賞歴を持つ建築家も、棟梁に自邸の離れの工事を依頼していたのだ。

資料を読むと、村野邸の離れとして棟梁が建てたのは茶室。六畳の広間に畳一畳大の板張りの平床ひらどこの設え、四畳半よじゅうはんの小間こまと水屋みずやに玄関、手洗場がついていた。

主人が用意してくれた棟梁の作品集の中に、村野本人が棟梁に初めて相対したときの印

象を素直に語った「最後の一人」というエッセイがあった。

〈縞しまの着物に特徴のある顔は、長い間の修練に耐えて自我を通してきた大棟梁の面影があった。その気骨は、金と権威に自らを捨てぬ不屈の魂たましいが躍如やくじょとして、寄らば切らんのかまえが感じられた。私は棟梁の向こう側に座った。瞬間、一言も言わぬうちからこの勝負は私が負けたと思った〉

棟梁は、巨匠建築家が、〈大棟梁の面影〉があると言ひ、〈負けた〉と書き残すほどの人物だったのだ。村野の口振りから、おそらく棟梁のほうが村野よりも遙かに年上なのだろうと思いつつ、ふたりの生年を確認する。

平田雅哉は明治三十三年（一九〇〇）生まれ、村野は同二十四年生まれ。その作品集が刊行されたのは昭和四十三年（一九六八）のこと。村野のエッセイが刊行直前に書かれたとすれば、当時、村野は七十七歳、棟梁は六十八歳。棟梁のほうが九歳も年下だったのだ。

棟梁の風貌について、直木賞作家・今東光こんとうこうは、このように描写していた。

〈平田さんに会った時、その顔に刻まれた太い皺を見て、これこそ風雪にめげない名人の顔だと思った。大袈裟に表現すればミケランジェロの顔に似たものがある〉

村野藤吾に〈負けた〉と言ひせ、今東光がこれほどまでに賛辞を惜しまなかった棟梁とは、いったいどのような人物だったのだろうか。

匠たちの名旅館
稲葉なおと・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 2,200 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7253-4

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)